

季報



No.123

2025 (令和7) 年11月

コンテンツ紹介

p.2 言葉探し

教職課程センター 特別任用教授 萩原 哲哉

p.3 読書の魅力を味わう

教職課程センター 特別招聘教授 北村 康子

p.4 東新宿文学散歩

p.6 お役立ち施設の紹介 東京書籍株式会社附設 教科書図書館 東書文庫

p.7 本学所蔵資料紹介 三島中洲書幅 作家のおやつ巡り⑫

p.8

本学教職員著書紹介

『大伴家持 都と越中でひらく歌学』

文学部国文学科 教授 塩沢 一平



九段

館内企画展示
「本とあるこう！さんぽで出会う文化と歴史」



柏

館内企画展示「ベストセラー本で綴る 昭和100年
～二松学舎大学附属図書館所蔵本より～」



言葉探し

教職課程センター 特別任用教授 萩原 哲哉

大学に入学した折、教育学部の国語専修のクラスで、自己紹介をする場があった。自分をはじめ、多くの者が「趣味は読書です」と話したのだが、全員の話が終わったあと、担当教授から次のような話があった。

「これからの皆さんにとって、『読書』は趣味とは言えなくなります。」

現代のように娯楽の多い時代ではなかったのに、高校上がり18歳の趣味と言えば、音楽・映画鑑賞、読書くらいである中、それを否定する言葉は、大きな衝撃であった。国語科教師を目指す者にとって、「趣味＝好んで楽しんで行うこと」として文章に臨んではいけない、という意味である。好き嫌いに関わらず、文章を読ませることを指導する立場を目指す以上、趣味とは別次元のものと考えなさい、ということであり、その後の自分自身への大きな戒めとなった言葉である。

実務家教員としてお世話になっている私には、国語科教育以外、専門的に深めた分野・時代・作家等はない。すべてに対して「広く・(極めて)浅く」という状況である。現場では「先生お薦めの本を紹介してください」という機会が度々あったが、毎回悩まされたものである。小学校では7歳から12歳の児童相手に、どの学年の子にも読めるものを選び、中学校では読書離れを食い止めるべく、軽めの書籍などを薦めたりしたものである。

そんな自分の読書生活は、「釣り糸を垂れる釣り人」のようなもの。「せっかく買い求めたのだから、何か有意義な内容がなければもったいない。」「時間をかけて読み切ったのだから、『面白かった』だけでは済ませたくない。」等、何かを得たい、すなわち読後に「ボウズ」状態であることを嫌うものである。それゆえ、自分の書棚にある書籍からは、多くの「付箋」がはみ出している。読んでいる際に、「いい言葉だなあ。」とか、「この文脈、いつか授業で使えそうだなあ。」というページに貼ってある。こうした「釣り上げた獲物＝気に留まったことばや表現・内容」に付箋を貼る習慣は、教職についてからより顕著になった。(もっとも糊付きの付箋が発売・普及したのも、この時期頃からであるが…)

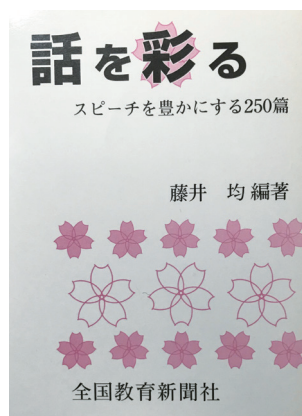
そうしているうちに、教員向けの名言集の書籍を作成するので原稿を書いてほしいと、先輩の先生から声をかけていただいた。さまざまな書籍から名句を取り上げ、その解釈や価値を解説したものを集め、

学校現場等で講話や文章を書く際の参考にするのをねらいとした書籍である。書棚の付箋が役に立ち、拙稿ながら何点か掲載していただいた。^{※1}

やがて自分の書棚には、国語教育関係の専門書や趣味の書籍以外に、自己啓発関係の書籍や箴言集などが多くなっていった。自分が愉しむことより、子どもや保護者に向けて、素晴らしい言葉や表現があることを伝えたい、という思いが主になったからであるが、もちろん自分自身の灯となる言葉とも多く出会えた。特に中谷彰宏氏や大谷徹獎氏(薬師寺僧侶)の書籍を好んで読んだ。大谷氏の言葉が書かれたカレンダーを買い求め、当時担任をしていたクラスに提げると、「この『てつじょう』って、先生ですか?」などと聞かれたことも思い出される。(大谷氏の言葉は、相田みつを氏のような独特の字体で書かれており、サインもひらがなで「てつじょう」と書かれているため、そう思ったようだ。)卒業生への色紙やサイン帳などにも、大谷氏の言葉『ここまでと思ったら そこまで』をよく書いていた。^{※2}

結局私にとって、読書は「言葉探し」。久しぶりに開いた本では、「なぜこの箇所に付箋を貼った(なぜこの言葉が気になった)のだろう。」と、その当時の自分の心象を振り返る機会にもなっている。しんどい時期に、自分を励ましてくれた言葉、先が見えない時に道を照らしてくれた言葉、考え方や生き方を改めるきっかけをくれた言葉…どれも出会えなければ今の自分はなかったのではないかと、思えるくらい、すべてが大切なものとなっている。

今後、自分自身の心象の変化に伴い、どのような言葉と出会っていけるのか、机上の付箋を補充し前向きな気持ちを感じながら、書棚の空きスペースを眺めている。



※1 『話を彩る：スピーチを豊かにする250篇』 編著者：藤井均 発行：全国教育新聞社 1995年

※2 『みんな迷いがあるんです』 著者：大谷徹獎 発行：クレスト社 1997年、p.64

読書の魅力を味わう

教職課程センター 特別招聘教授 北村 康子

なぜ国語の先生になろうと思ったのか。これを考えたとき、いつも思い出す風景は天井から床までの父の大きな書棚である。私の周りにはいつも本があった。手を伸ばせば本に触れることのできる環境にあって、土日になると踏切近くの本屋に行き、父からいくらでも買って読みなさいという言葉に、本を次々と買うことができた。小学校ではハインリヒ・シュリーマンや野口英世の伝記、十五少年漂流記、ガリバー旅行記などは何度も繰り返し読んでしまうものだから、仕舞いには表紙が破れてしまうことも度々あった。学校帰りに本を読みながら歩いてはいけないと母にはよく叱られたものだ。特に中学生になって文学史を学び始めた頃には、学級文庫を読み、学校図書館にも通い、森鴎外や島崎藤村、夏目漱石などの難解な文章を読み始めたことが懐かしい。平日は学校の宿題や課題があって、なかなか読書の時間をもてないが、土曜日はちょっと違う。自分の勉強ができるという高揚感が読書に向かわせた。食事や睡眠の時間も惜しんで、気付けば日曜日の薄っすらとした朝焼けに気づくなんてことも普通にあった。学校の勉強よりもこの時間がたまらなく魅力的だった。探究することが好きだった。何よりも興味のあることにのめり込むことが尊いと感じてしまう。かつて自由研究なるものがあった。小学校の代表児童として研究発表をし、中学校入学後は国語だけでなく勉強が趣味になった。知ることが楽しくてたまらなかった。字を読むこと、書くことに飢える感覚があった。

そして今がある。東京都の中学校の国語科の教員となって、国語を教える立場になり学校図書館司書教諭の資格を生かした。読書指導をする立場でありながら、字を読むことに心が奪われてしまう。中学生の読書感想文の指導では、生徒の考えや思ったことを書き表す楽しさや喜びが随所に感じられて我を忘れて読み耽った。作品自体に読み手を惹き付ける魅力やエネルギーがあって、生徒は作品に向き合い、受け止め、掘り下げていく。そして、はっとさせられた内容をつかみ、驚きや発見を素直に言葉にして厚みをもたせていく。教科毎に学習が進み、専門的な語句や語彙力、伝え

合う力も身に付き、様々なジャンルの本に触れ、視野を広げ、知識や発想を深めていく。単に読むことだけでなく友達と本の内容について、話す、語ることや、自分で深く探究し、考えや思いを書く、話す力につなげる生徒もいた。そんな中、ノートルダム清心学園元理事長の渡辺和子氏の『置かれた場所で咲きなさい』を読んだ生徒の読書感想文があった。困難や悩みを超えようとするその生徒の強い思いが体験談として綴られ、読み手を惹き寄せ、全国大会出品、文部科学大臣賞受賞となるまでになった。読書活動は本来読み手の個別の活動で、この作品、あの作家が好き、面白い、楽しい、もっと読みたいというような発意からの自発性が尊重される魅力あるものである。しかし、いつの間にか、学力向上策、読書率や図書館利用率の向上ばかりが先を行く。どうしたらよいのかと国語科の先生方は悩んだはずだ。文庫本一冊読みを夏休みの課題図書にした。職場体験の事業所に地域の図書館が参画した。課題図書を設定し書評座談会として作家の皆さんに逢う機会を設定した。米倉斉加年氏、椎名誠氏、工藤直子氏、松谷みよ子氏、森絵都氏、佐藤多佳子氏等、生徒とともに私が感銘を受けたのは言うまでもない。言葉、発声の美しさだけでなく、思いの艶やかさは言葉にならない。読書通帳の提案をし、地域の司書の皆さんが学校図書館の読書指導として参画されたこともあった。そして、中学生の時に読んだ本を、青年になって、また大人になってからもう一度読んでほしいと願い伝える日々であった。果たして、私は、生徒に読書の魅力を伝えることができただろうか。

先日、教材研究のために、本学の九段図書館で向田邦子氏の『父の詫び状』を改めて読む機会があった。大学生に国語科教育法等を教授する立場になっても、読書の魅力は私の心を豊かにしてくれる。作品の中の不器用にしか愛情を表せない父親の姿に、大きな書棚と本はいくらでも買って読みなさいと言われた私の亡き父が重なり、思わず笑顔になる。読書の魅力を味わうとは、きっとこうしたことなのだ。

東新宿文学散歩

今号は、今秋のNHK連続テレビ小説「ばけばけ」で描かれる小泉八雲（1850～1904）に関する史跡が残る東新宿を巡ります。

まずは新大久保駅（山手線）から東新宿駅（都営大江戸線）に向かって歩くと、途中に「小泉八雲記念公園」①があります。ギリシャで生まれた小泉八雲（出生名：ラフカディオ・ハーン）は1890年に40歳で来日し、松江で英語教師となつて以来、熊本・神戸・東京と居を移しながら、精力的に執筆活動も続けました。このギリシャ風の公園は、新宿区と故郷のレフカダ島が友好都市となった記念に造られ、園内には八雲の胸像②も設置されています。公園から少し進んだ先には、「小泉八雲終焉の地」の碑



③が建っています。八雲は1896年に東京帝国大学文科大学の英文学講師として働き始めますが、1903年に解雇され、後任に夏目漱石（1867～1916）が就任します。その後は早稲田大学で教鞭を執る傍ら日本研究を重ね、『怪談』などの著作を発表しましたが、1904年9月26日狭心症によりこの地で54歳の生涯を閉じました。



東新宿駅へ向かう職安通り沿いには、「島崎藤村旧居跡」④もあります。1905年に長野の私塾・小諸義塾を退職した島崎藤村（1872～1943）は家族とともに上京し、翌1906年10月に浅草新片町に転居するまで居住しました。この地で完成させた代表作『破壊』によって作家としての名声を得た藤村ですが、一方で転居早々三女を亡くし、続いて次女と長女も病死するなど悲しい思い出の地でもありました。



東新宿駅から明治通りを南下すると、蔦が絡まるレンガ造りが特徴の酒場「どん底」⑤があります。ロシアの作家ゴーリキーの同名小説から名付けられて、1951年に開店したこの店には三島由紀夫（1925～1970）が通っていました。



靖国通りを東へ向かうと、江戸時代に遊女たちが葬られていたことから「投げ込み寺」とも呼ばれている「成覚寺」⑥があります。寺内には『金々先生栄花夢』を刊行し、『鸚鵡返文武二道』など当時の世相や人情を風刺した黄表紙の祖とよばれる江戸時代中期の戯作者・恋川春町（1744～1789）の墓⑦があり、墓石には「生涯苦楽四十六年、即今脱却浩然帰天」と辞世の句が刻まれています。

少し南下したところにある「太宗寺」⑧の近所には、夏目漱石が1歳の時に養子に出された塩原家がありました。自伝的小説である『道草』



には、主人公の健三が路を隔てた向こうにある「胡坐をかいて蓮台の上に坐って・・・太い錫杖を担いで・・・頭に笠を被っていた」仏様に攀じ登った様子が描かれています。

富久町西交差点の近くには、装幀家で美術評論家の青山二郎（1901～1979）が1933年から約8年間を過ごした「花園アパート」⑨がありました。ここには、同じ頃に小林秀雄（1902～1983）や中原中也（1907～1937）とその妻も居住したほか、青山の部屋には三好達治（1900～1964）・大岡昇平（1909～1988）・河上徹太郎（1902～1980）らが集って文学サロンと化し、通称「青山学院」と呼ばれていました。

南へ向かうと花園公園があります。ここは怪談噺や人情噺を得意とし、幕末から明治にかけて活躍した近代落語の祖三遊亭円朝（1839～1900）が1888年から1895年まで住んでいた場所で、園内には「円朝旧居跡の碑」⑩が建っています。当時は孟宗竹の深い藪や野菜畑に囲まれた田園風景が広がっていて、円朝は喧噪を避けてこの地を選んだそうです。

四谷4丁目交差点の先には、歌人以外に精神科医の顔も持つ斎藤茂吉（1882～1953）が1950年から亡くなるまでの約2年間を過ごした「斎藤茂吉終焉の地」⑪があります。茂吉は、最晩年で体調が優れないなかでも2冊の歌集を刊行し、1951年には文化勲章を受章しました。書斎は山形県にある斎藤茂吉記念館に復元展示されています。

日に日に秋が深まるこの季節、散歩の後は自然豊かな都会のオアシス新宿御苑でゆっくり体を休めてみていかがでしょうか。



東京書籍株式会社附設 教科書図書館 東書文庫



写真：東書文庫提供

どんな施設？

1936 年（昭和 11 年）に開館した、日本で最初の教科書図書館です。鎌倉時代から江戸時代の「往来物」、明治から令和までの「教科書」約 16 万点を所蔵しており、そのうち 76,420 点が国指定重要文化財です。所蔵資料の閲覧ができる閲覧室だけでなく、実物の教科書や掛図を解説とともに紹介する展示室もあります。

また、アール・デコ様式を取り入れた建物は「東京都北区指定有形文化財（建造物）」に指定されています。

どんな資料がある？

展示室 教科書の歴史が通観できる



教科書の歴史は
教育史そのもの

実物の教科書や掛図を、丁寧な解説や映像資料とともに見ることができます。鎌倉時代から現代の最新の教科書まで、学校教科書がどのように発行されたのか、どのような内容なのか分かります。

こんな見どころも ※展示資料は定期的に入替があります。

- ・時代によって印刷技術や製本方法が変わっていく様子が分かります。
- ・印刷された教科書の挿絵と、印刷に使われた版木を見比べられます。
- ・文化財の修復前後の様子が分かります。

閲覧室 歴代の教科書が検索・閲覧できる



写真：東書文庫提供

ひとつの教科の
教科書を時代を
追って見たい

メモを取るための
ノート、ノートPC
持ち込み可能です

あの文学作品は
いつのどの教科書に
載っている？

閲覧方法

蔵書検索で見たい資料を特定し、閲覧表に記入・提出して出納してもらいます。一部の資料はデジタルデータで閲覧できます。

閲覧表は、事前にウェブサイトからダウンロードして記入したものを持参しても OK。

蔵書検索

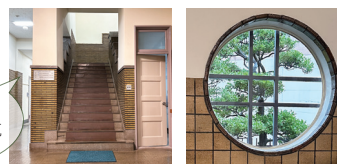
館内 PC やウェブサイトで検索できます。1949 年（昭和 24 年）以降の小学校・中学校の国語教科書は、収録作品名・作品作者名からでも検索できます。

アール・デコ様式の建築意匠

建物外側からは、円形に突き出した部屋や、花崗岩で装飾されたポーチの円柱、スクラッチ様のタイルなど全体を見て楽しむことができます。

内側からは、丸窓や梁のアーチ、ジグザグの形を強調した階段、泰山タイルなど、細かな装飾を間近に見られます。

昭和初期の
レトロな雰囲気



利用するには？

予約必要

入館無料

開館日時：展示室…月曜日～金曜日（祝日除く）／閲覧室…水曜日～金曜日（祝日除く）
いずれも 9:30 ～ 16:00（12:00 ～ 13:00 除く）

アクセス：〒114-0005 東京都北区栄町 48-23 TEL:03-3927-3680

（東京さくらトラム栄町駅より徒歩 3 分・JR 王子駅南口より徒歩 10 分・東京メトロ王子駅より徒歩 13 分）

予約方法や利用の手引きはウェブサイトで確認 <https://www.tosho-bunko.jp/>

蔵書検索も
こちら

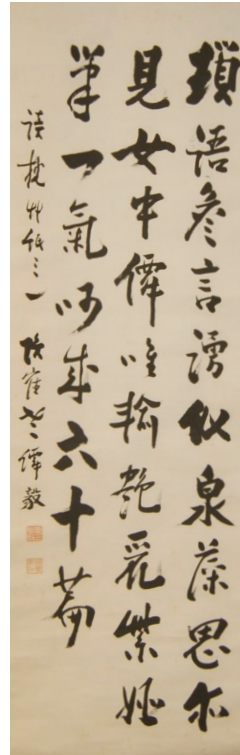


本学所蔵資料紹介

三島中洲書幅 讀枕草子之一

明治四十二年

三島中洲（一八三〇～一九一九）…本学創立者。
明治十（一八七七）年六月大審院判事を退職、同年十月漢学塾「松学舎」を設立。明治二十九（一八九六）年東宮侍講、明治四十五（一九二二）年新帝（大正天皇）の侍講となる。大正四（一九一五）年宮中顧問官に任じられ、一等官に叙せられた。



瑣語詹言湧似泉

瑣語詹言 湧くこと泉に似たり

藻思亦見女中仙

藻思亦た見る 女中の仙

唯翰豔麗紫姬筆

唯だ翰す 艶麗 紫姫の筆

一氣呵成六十篇

一氣呵成の六十篇

『枕草子』の文章は、ことばづかいが細やかで多言なこと、まるで泉が湧くかのようにであり、文才もまた見るべきものがあり、女流作家のなかの仙人のようである。ただ、あでやかな美しさだけは紫式部が一息に書き上げた『源氏物語』五十四帖に及ばない。

（石川忠久編 『三島中洲詩全釈』第四巻より）

作家のおやつ巡り⑫

『金色夜叉』を執筆し、泉鏡花（1873～1939）や徳田秋声（1872～1943）など多くの人気作家を育てた尾崎紅葉（1868～1903）は、増上寺界隈にある首尾稻荷神社のそばで生まれました。その生家からほど近い場所に、日本橋の老舗和菓子店「榮太樓總本舗」から暖簾分けされ、1885年に創業した「芝神明 榮太樓」があります。この店をよく利用していた紅葉が1902年に命名した「江の嶋最中」は看板菓子で、包装紙の文字も紅葉の書体です。



「神明前榮太樓の菓子包紙の題簽を求む、『江の島』の三字を書して与ふ」※

鮑、牡蠣、帆立、赤貝、蛤の貝殻をかたどった一口サイズの最中は、中の餡もつぶ、白、こし、ごま、ゆずの5種類があり、異なる味を楽しめます。

首尾稻荷神社には「尾崎紅葉生誕の地」の案内板があるので、そちらにも立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

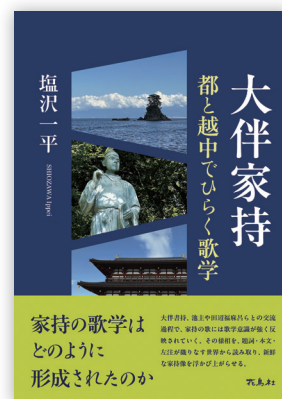


※『紅葉全集 第11巻 紀行・日記』
岩波書店 1995年刊

本学教職員著書紹介

『大伴家持 都と越中でひらく歌学』

塩沢 一平 著
(花鳥社、2025 年 2 月刊行)
A5 判 276 ページ 7,500 円＋税
ISBN 978-4-86803-019-5



大伴家持の歌分析以外に、もう一つの大きなテーマがある。それは、万葉時代に歌を作るとき、もらって読むとき、そしてそれを万葉集に載せるように書くとき、それぞれのときに、歌は歌われていたのだろうか。このことを分析して、その結果を知らせるということである。

現代の歌は、Mrs. GREEN APPLE の大森元貴も藤井風も、歌を作りながら歌っているだろうし、聞く方も、口ずさんだり、カラオケでみんなに聞かせたり。歌声に満ちた世界。ポーズを入れたり、三浦大知をきどって超絶ダンスを入れる人もいる。古代の歌を分析するときに、書かれた文字の世界だけを見て、ああだこうだいうのでは、ほんの一面だけを拡大解釈していることになるかもしれない。

飛鳥京跡苑池では、池の上にせり出した水上舞台が見つっている。そこでは、歌や舞が繰り広げられたり、祭祀によってトランス状態になっていた人々もいたかもしれない。『万葉集』には「歌儺所」ということばも見られ、歌とダンスをマネジメントする部署もあったことがわかっている。ふくよかで豊穡であろう歌の世界を理解する一歩となることが 1 つのテーマになっている。

また、大伴家持の歌も、歌単独を見ているだけでは理解できていない点が多いのかもしれない。今、書店に並んでいる文豪の本。巻かれたカラフルなカバーと一緒に印象は、ライトノベルかマンガのようなものとなって映る。このように、家持の歌も、歌本文そのものだけでなく、題詞（前書きのテーマ）や左注（補足説明）や配列など、もっと広く歌をとらえて考えてみた。この分析方法（パラテキスト）理論によって、家持が歌をどのようなものと考えていたかという歌学を探ってみた。

ちなみにこの本は青基調で、カバーは、私が撮影した越中と家持、平城京朱雀門の写真も組み込まれた清々しい形に作ってもらった。

文学部国文学科 教授 塩沢 一平

編集後記

「季報」123 号をお届けします。

今号では、教職課程センターの教授 2 名の本にまつわるお話を紹介しました。また、歴代の学校教科書を所蔵する教科書図書館「東書文庫」をご案内しています。日本で最初の近代的学校制度を定めた「学制」が公布されたのは、1872 年（明治 5 年）です。制度や教科書の変遷から時代が垣間見えます。

さらに、「東新宿文学散歩」では教師としても活躍していた小泉八雲に注目しました。(Sh)

二松学舎大学附属図書館

季 報

第 123 号

発行日 2025 年 11 月 1 日

発 行 二松学舎大学附属図書館

(九段) 〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

電話：03-3263-6364

(柏) 〒277-8585 千葉県柏市大井 2590

電話：04-7191-8758

印刷所 株式会社 サンセイ